

町内遺跡 IV

編集 高原町教育委員会

発行 〒889-4492

宮崎県西諸県郡高原町大字西麓899

印刷 (株)長崎印刷

宮崎県西諸県郡高原町大字後川内18-2

はじめに

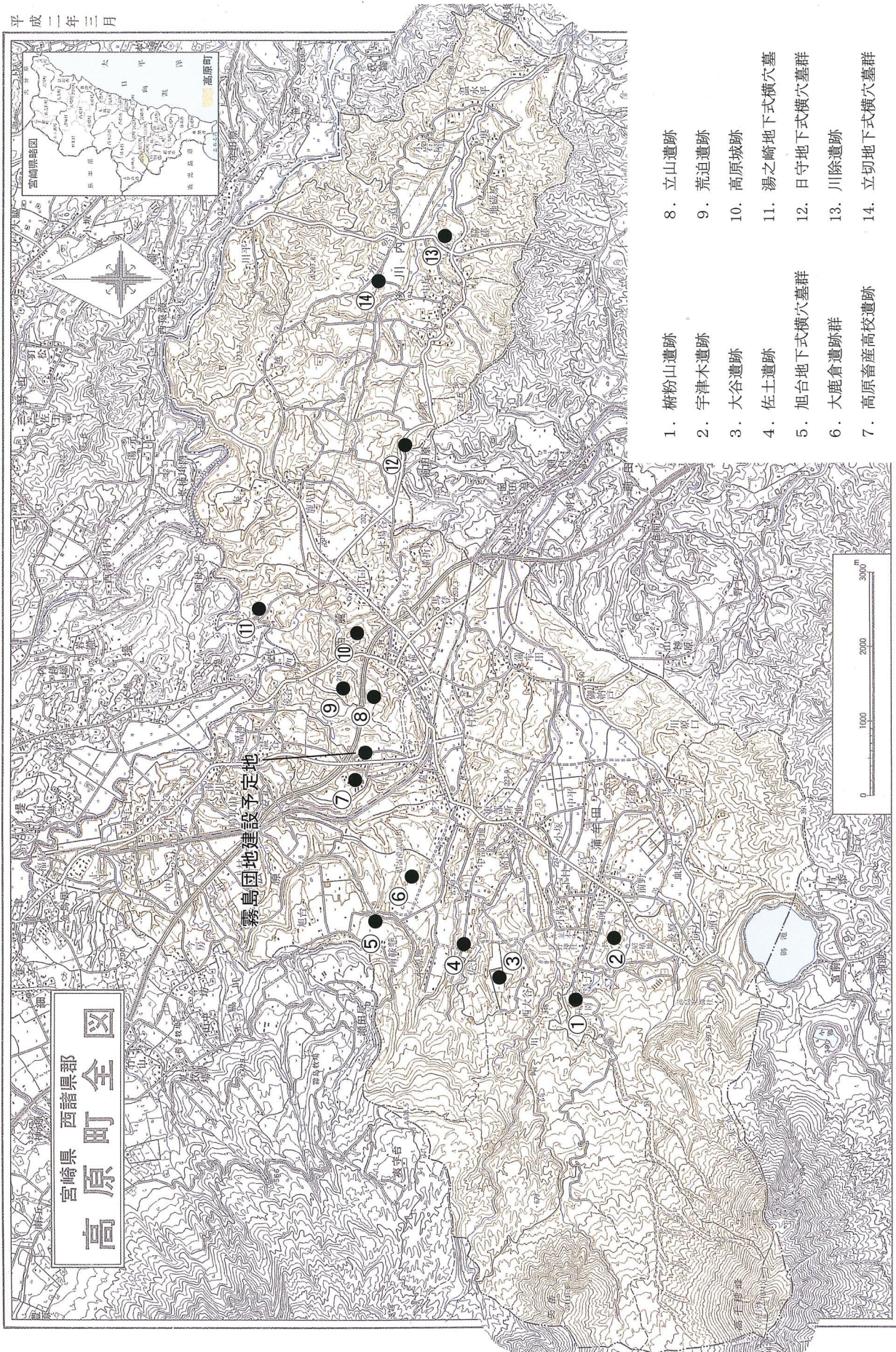
高原町教育委員会では、圃場整備や建設事業など、様々な開発事業に伴う試掘調査や踏査等を実施している。本報告書では、主に平成15年度に実施した試掘調査・踏査の成果について報告する。

又、日守地下式横穴墓群より出土した鉄製品について、樹種等の分析を実施した(財)元興寺文化財研究所保存科学センター作成の報告書も併せて掲載する。

- 調査主体 高原町教育委員会
教育長 外山方圀
社会教育課 課長 黒木嘉民
係長 益本一博
○調査員 社会教育課 主事 大學康宏



第1図 高原町俯瞰図(東北方向より撮影)



第2図 本報告書関係遺跡位置図

この地図は、建設省国土地院院長の承認を経て関係機関より5万1:1地形図を転写したものである。測量番号 平2九地測四四号

第1章 高原町の歴史

高原町は、宮崎県の南西部、鹿児島県との県境に位置する。東西約18km・南北10kmと東西に長く、面積は85.42㎡、中心部でややくびれている。市街地の標高は約200m前後、町内の殆どは広大な台地とその周囲を巡る谷で占められ、そのうち山林・原野は、町域の約50%を占めている。

高原は、後ろに高千穂峰がそびえている事もあって、以前から天孫降臨の地として認識されていたようである。江戸時代末期に編纂された『三国名勝図會』では、「高原」を「高天原」の略称とする伝聞を掲載している。

又、高原は、神武天皇御降誕の地としても名高い場所である。『日本書紀』にある神武天皇の幼名「狭野尊」が当町の狭野地区を指しているというのが主な根拠であるが、江戸時代半ばから末期にかけての神社関連の古文書の中に複数の地形を挙げて神武天皇の『聖蹟』としている。ただ、具体的な説明はなく、現在説明されている神武天皇関連の説明の大筋は『三国名勝図會』に基づいている。伝承では、いわゆる東征までこの地で暮らしたとされている。

1. 縄文時代

高原町では、縄文時代早期以前の遺跡は発見されていない。現在のところ確認できるのは縄文時代前期以後である。又、調査事例自体が少ないので、大半は表採資料に基づいている。

高原町の東側の後川内地区に位置する川除遺跡では、平成9・13年度に発掘調査したところ、古代の畠遺構を構成する土層から曾畑式及び轟B式土器が数点確認された。又、大谷遺跡では、表採資料の中に曾畑式が数点確認された。縄文時代前期の遺跡は、現在のところ、この2遺跡のみである。

縄文時代中期になると、徐々に遺跡が増加する。昭和43年に発掘調査され、高原町で初めて縄文・弥生時代の遺物が層位的に確認された高原畜産高校遺跡や榊粉山遺跡などで阿高式土器が出土した。

縄文時代中期末から後期に入ると、遺跡の数(というよりも遺物量)が爆発的に増大する。主な遺跡としては、前述した高原畜産高校遺跡、正式な発掘調査を踏まえてはいないが莫大な表採資料を抱える大谷遺跡や佐土遺跡・榊粉山遺跡などである。しかし、その殆どが包含層からの出土であり、遺構は検出されていない。

縄文時代晩期に入ると、資料数は減少する。わずかに佐土遺跡などで確認された程度である。

2. 弥生時代～古墳時代

弥生時代の遺跡については、表採資料も非常に少ない。地元の話では20～30年前の耕地整理の際に大量の弥生土器が出土し、子供達が採集していたと云われているが、それらも残っておらず、具体的な様相は不明である。わずかに、荒迫遺跡と立山遺跡で住居跡と弥生土器が出土している。しかし、年代については流れ込みの可能性が高く、弥生～古墳時代という判断にとどまっている。

古墳時代の集落については、調査事例は立山遺跡のみである。

高原町の場合、集落遺跡よりも地下式横穴墓の方が著名である。高原町では、これまでに4群107基が検出されている。その内訳は、湯之崎地下式横穴墓群1基・旭台地下式横穴墓群13基・日守地下式横穴墓群31基・立切地下式横穴墓群72基である。いずれも昭和40年代後半から発見されはじめ、50～60年代に発見のピークを迎えた。埋葬位置による墓群の関係や墓前祭等が指摘されている。時期については、副葬品より5世紀後半から6世紀前半頃と思わ

れるが、一部には5世紀前半に遡るものも出土している。なお、地下式横穴墓に伴う集落はまだ見つかっていない。

3. 古代～中世

地下式横穴墓の衰退後、9世紀頃まで全く生活の痕跡が見えなくなる。9世紀に入ると、数箇所ですべて同時に開墾が行われている。住居跡などはあまり検出されないのに対し、畠と思われる畝状遺構が多数検出されている。荒迫遺跡・川除遺跡・梶粉山遺跡で畝状遺構が検出されている。このうち、最も広範囲で検出されたのが荒迫遺跡である。しかし、長期間に渡って耕作されたのではなく、9世紀後半から10世紀にかけてのごく数年間に使用されたと推測されている。又、栽培作物については未だ判明しておらず、川除遺跡や梶粉山遺跡で若干のイネの痕跡が見られた程度で、大方は根菜類の可能性が高い。

この畠が使用されなくなった後は、ススキなどが生息する野原のような状態になったと思われる。その後はほぼ山として認識されていたようで、鎌倉時代から中世にかけては、荒迫遺跡・大鹿倉遺跡・梶粉山遺跡・宇津木遺跡などで狩猟用と見られる陥し穴が数多く検出されている。ただ、かなり散発的あるいは不規則に作られているため、狩猟方法や対象動物などについては不明である。

文献では、主に霧島山の記述が徐々にではあるが増加する。『続日本後紀』や『日本三代実録』には「霧島岑神」が登場する。承和4年(837)に官社に列せられて従五位上の位が与えられ、続く天安2年(858)には従四位下に昇格した、とある。又、『延喜式』「十神祇」には、諸縣郡一座として「霧嶋神社」の名が挙げられている。いずれも「霧島(岑)」のみの記述なので、具体的な場所を指すのではなく、霧島山を神格化した名称であろう。『倭名類聚抄』には、「諸縣(牟良加多)郡」の中に8郷が挙げられているが、当地方を指しているのは、現在のところ春野郷という説が有力である。

霧島山に対する信仰は、10世紀半ばに当地方で修行したと云われている性空上人が有名であるが、文献に霧島山信仰に関連する記述が見られるのは15世紀以降で、島津氏による積極的な援助により発展を遂げたと思われる。

現在の町域は三俣院あるいは真幸院に含まれていたと推定されている。又、真幸院の北原氏・日向中部の伊東氏・薩隅の島津氏の勢力争いの場になったが、天正4年(1576)、島津義久・義弘ら島津勢が伊東方の高原城を攻め落とすと共に周辺諸城も落城し、島津氏の領地となった。豊臣秀吉の九州平定以後、島津久保、次いで島津義弘の領地となるなど変動するが、以後薩摩藩領として定着する。

4. 近世以降

島津氏の統治下に入った高原郷には地頭制が敷かれ、地頭については鹿児島から派遣された。

当初の領域は、現在の高原町と高崎町を含めた範囲であったが、延宝8年(1680)の領域変更に伴って高崎郷が独立、代わって小林郷広原村と紙屋郷水流村が編入され、5村体制となった。

郷内に所在していた霧島東神社や狭野神社は、島津氏の手厚い保護を受け大きく発展した。これらの神社には「神舞(カンメ)」と呼ばれる神楽が伝承されており、現在も続いている。

明治時代に入り、明治16年(1883)に宮崎県が設置されると、同年6月には北諸県郡、翌17年(1884)1月からは西諸県郡に属した。その後、明治22年(1889)の町村制施行に伴い、麓・蒲牟田・広原・後川内の4村が合併して高原村が成立、昭和9年(1934)には町制施行に伴って町に昇格し、現在に至る。

第2章 広原第4遺跡の試掘調査

1. はじめに

広原第4遺跡は、高原町大字広原字広原4947番地付近、町営住宅霧島団地周辺である。遺跡詳細分布調査で、近世から近代と思しき陶器片を採集、遺跡登録した。遺跡西部には、阿高式土器などが出土した高原畜産高校遺跡、北側には九州自動車道宮崎自動車道建設に伴う分布調査で確認された前温谷遺跡(旧名荒迫遺跡)などがある。又、谷1つ隔てた東側には立山・荒迫遺跡がある。

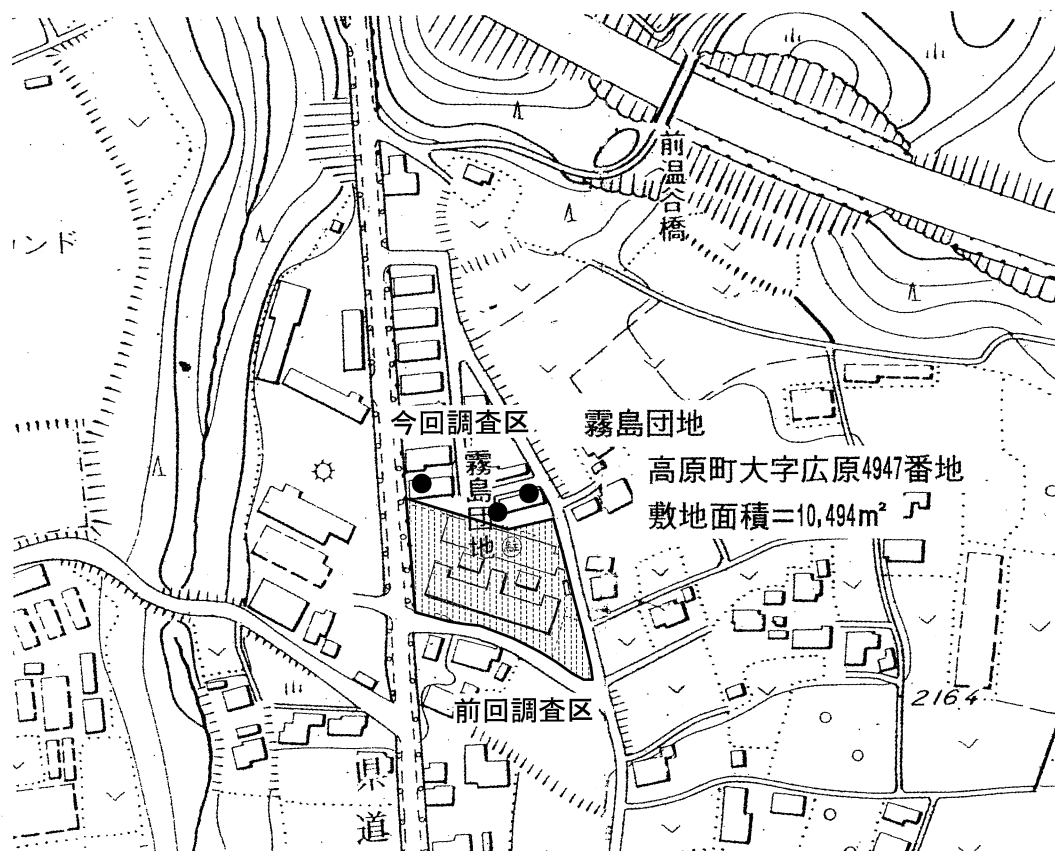
2. 調査の経緯及び成果

広原第4遺跡の試掘調査は2度目である。前回は平成13年度、町営住宅霧島団地建設に伴う調査であった。今回は、前回調査区の北側で、調査理由は前回と同じく町営住宅霧島団地建設による試掘調査である。

試掘調査は、平成16年1月13日から19日にかけて行われた。事業予定地内に任意に試掘坑を3箇所設定し、人力で掘削しながら遺構・遺物の把握を行った。

当地を掘削したところ、表土部分の大半が分厚い整地土層であった。整地土の下から高原スコリアなど通常の土層が続く。試掘調査では、御池ボラ層付近まで掘削したが、遺構・遺物は見られなかった。当敷地内は、当初の霧島団地造成時に大規模な整地を行ったため、現地形と旧地形は大きく異なっている事がわかった。

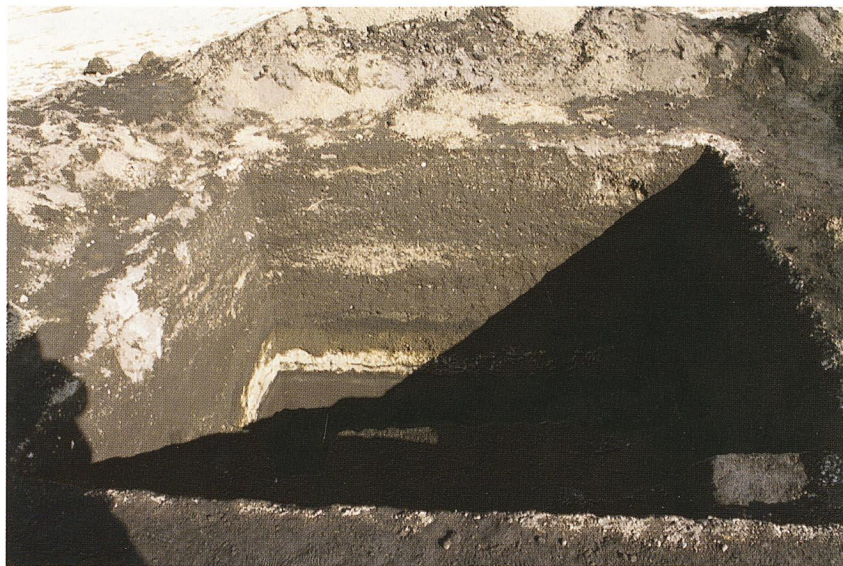
今回の調査区は、試掘坑より西側に下る旧地形が検出された事、さらに北方の集会所建設予定地では平成13年度調査と同じくアカホヤ・カシワバンが地表近くで露出している事から、事業区内は西へと下る小さな谷地形であったのが、団地造成時に削平された南北の尾根の廃土で埋め立てられたものと推測される。



第3図 広原第4遺跡試掘調査位置図



広原第4遺跡試掘調査遠景



広原第4遺跡試掘調査層序(1)



広原第4遺跡試掘調査層序(2)

第3章 日守地下式横穴墓群出土の金属製品の分析

○はじめに

日守地下式横穴墓群は、高原町大字後川内字日守に所在する遺跡である。
下記分析については、(財)元興寺文化財研究所保存科学センターが行った。

○分析成果

1. 調査対象

No. 1	鉄剣	鞘木の樹種
No. 2	鉄鏃	柄の観察
No. 3	ヤリガンナ	柄の材質(鹿角の可能性の有無)
No. 4	刀子	柄の材質(鹿角の可能性の有無)
No. 5	ヤリガンナ	柄の樹種

2. 使用機器及び測定条件

- ・実体顕微鏡 ((株)オリンパス製 S Z H - I I L D)
- ・走査型電子顕微鏡 ((株)日立製作所製 S - 4 1 5 形)
- ・エネルギー分散型ケイ光 X 線分析装置(セイコーインスツルメンツ(株)製 S E A 5 2 3 0)
試料の微小領域に X 線を照射し、その際に試料から放出される各元素に固有のケイ光 X 線を検出する事により元素を固定する。
モリブデン管球使用、真空条件下、コリメータ 0.1mm、管電圧 50kV

3. 方法及び結果

①No. 1 鉄剣 鞘木の樹種鑑定(写真1)

極微量の鞘木を採取し、走査型電子顕微鏡で木材組織の観察を行った。

木はサビ化していたが、柾目面の放射組織に針葉樹の鑑定に重要なポイントとなる分野壁孔が観察された。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に2個観察された事よりヒノキの可能性が高いと考えられた。

②No. 2 鉄鏃 柄の観察(写真2)

柄はサビに覆われていたが、紐状のものがラセン状に巻かれているようなラインが見られたため柄のクラック部分から微量採取し、実体顕微鏡及び走査型電子顕微鏡を用いて組織の観察を行った。

柄は、幅 5 μ m 程度の繊維状のものが平行に繋がった状態で巻かれている事が明らかになったが、その材質については、現時点では不明である。

③No. 3 ヤリガンナ 柄の材質(写真3)

エネルギー分散型ケイ光 X 線分析装置で、柄の黄白色部分の元素分析を行った。また、柄の側面及び江尻部分を実体顕微鏡で観察し、鹿角の可能性の有無を検討した。

分析で、黄白色部分から主元素として鉄(Fe)、リン(P)、カルシウム(Ca)が検出された。カルシウムとリンは、骨や歯、角の主成分である(図1)。なお、微量成分のストロンチウム(Sr)は土壌成分に由来すると思われる。

また、柄の側面及び柄尻部分の組織は、多孔質である事は確認できたが、サビ化が進んでいたため、骨組織かどうかの断定はできなかった。

以上より、柄に鹿角が用いられていた可能性はあると考えられた。

④No.4 刀子 柄の材質(写真4)

エネルギー分散型ケイ光X線分析装置で、柄の赤褐色部分の元素分析を行った。また、柄の側面及び柄尻部分を実体顕微鏡で観察し鹿角の可能性があるかどうかを検討した。

分析で、赤褐色部分から主元素として鉄(Fe)また、微量元素としてリン(P)、ケイ素(Si)が検出された(図2)。カルシウムとリンは、骨や歯、角の主成分である。また、ケイ素は土壌成分に由来すると考えられるが、ヒ素及び鉛は他の遺物からの汚染などが推測できるがその由来は不明である。

また、柄の側面及び柄尻部分の組織は、多孔質である事は確認できたが、サビ化が進んでいたため、骨組織かどうかの断定はできなかった。

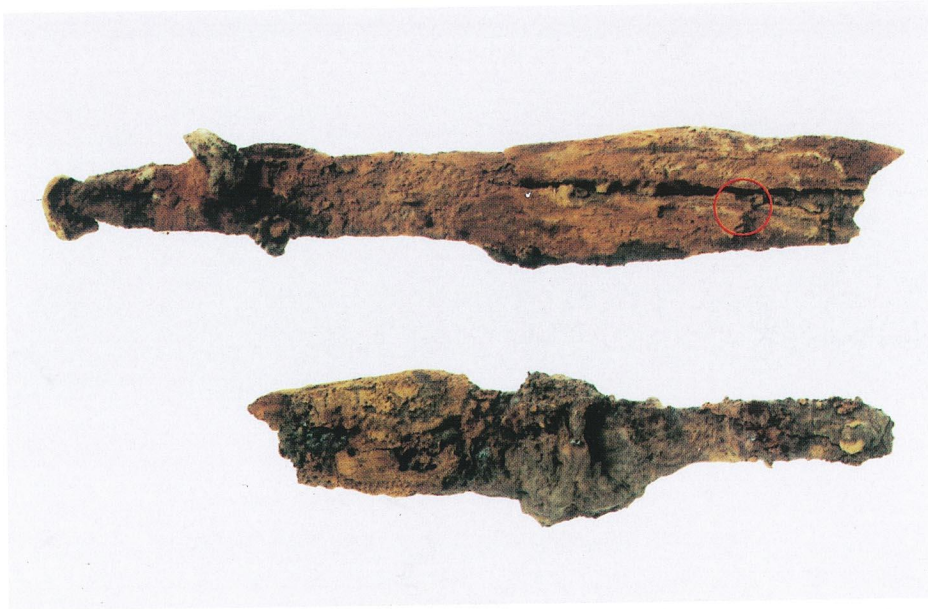
以上より、柄に鹿角が用いられていた可能性はあると 考えられた。

⑤No.5 ヤリガンナ 柄の樹種鑑定(写真5)

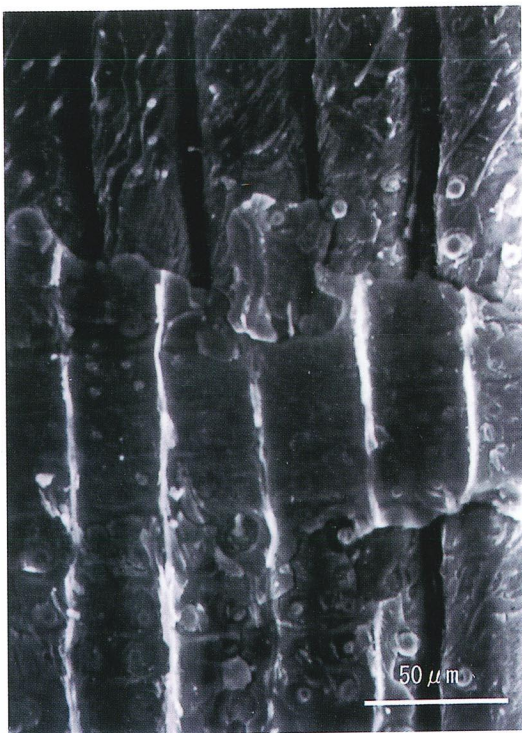
極微量の鞘木を採取し、走査型電子顕微鏡で木材組織の観察を行った。木はサビ化しており、試料採取が困難であった。

木口面に道管が観察されたが、その分布状態は試料が少なく不明であった。板目面、柁目面は観察ができなかった。

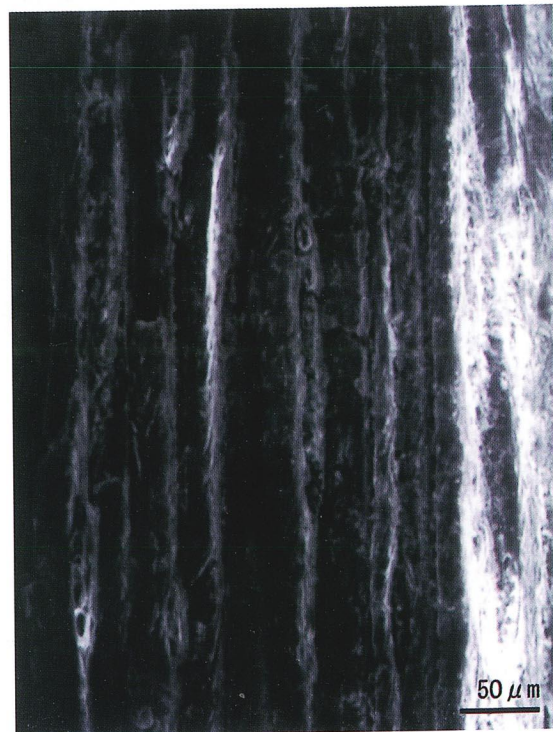
以上より、広葉樹ではあるが、樹種は不明である。



a 全体



b 柁目面（電子顕微鏡）

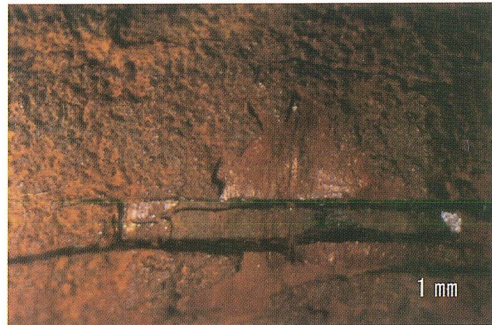


c 板目面（電子顕微鏡）

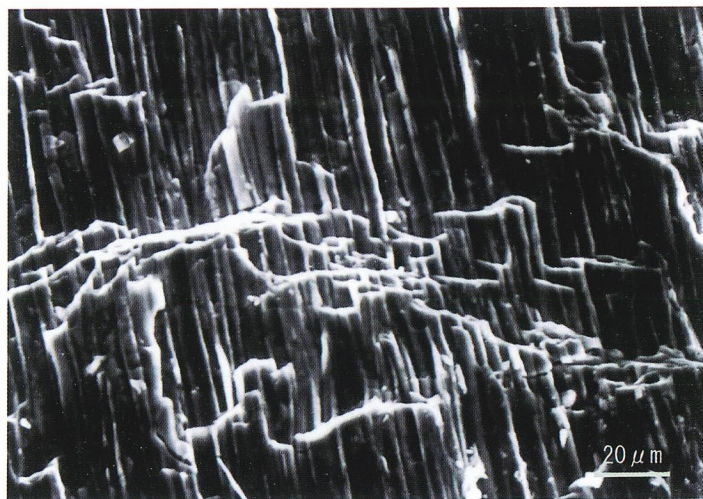
写真1 No.1の鉄剣の木材組織（ヒノキ）



a 全体

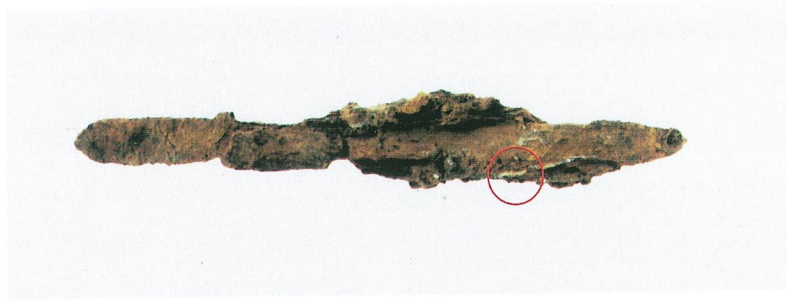


b 部分拡大（実体顕微鏡）

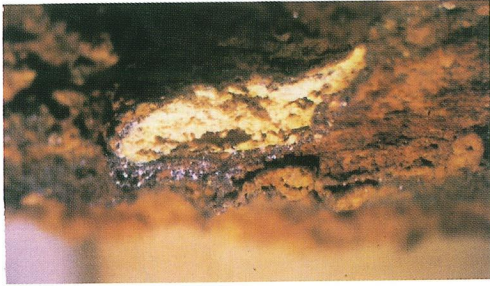


c 部分拡大（電子顕微鏡）

写真2 No.2の鉄鍬の柄



a 全体



b 部分拡大



c 柄尻

写真3 No.3のヤリガンナの鹿角様部分



a 全体



b 部分拡大

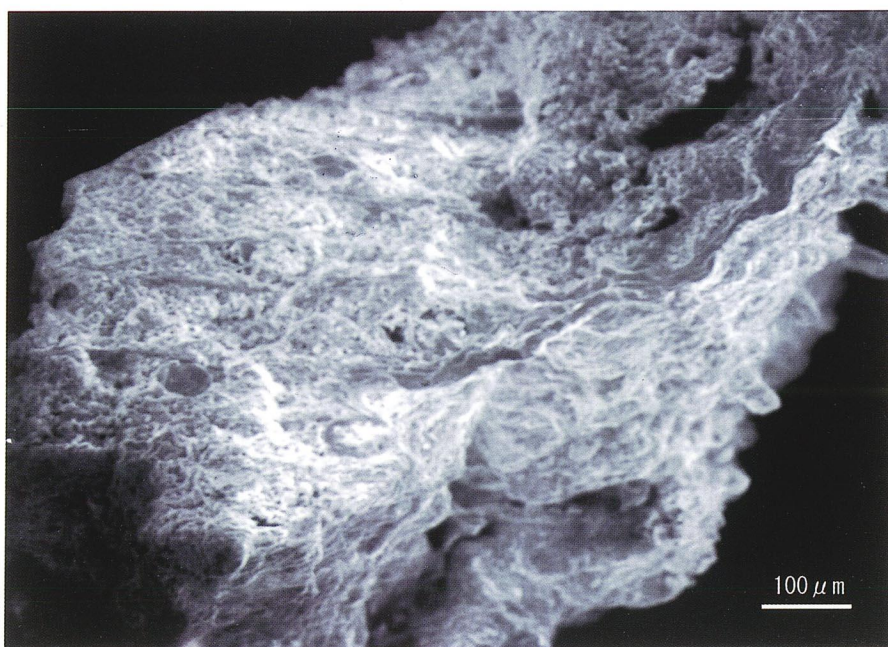


c 柄尻

写真4 No.4の刀子の鹿角様部分



a 全体



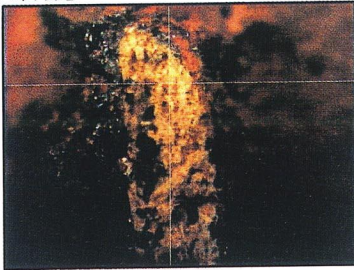
b 木口面（電子顕微鏡）

写真5 No.5のヤリガンナの木材組織（広葉樹）

[測定条件]

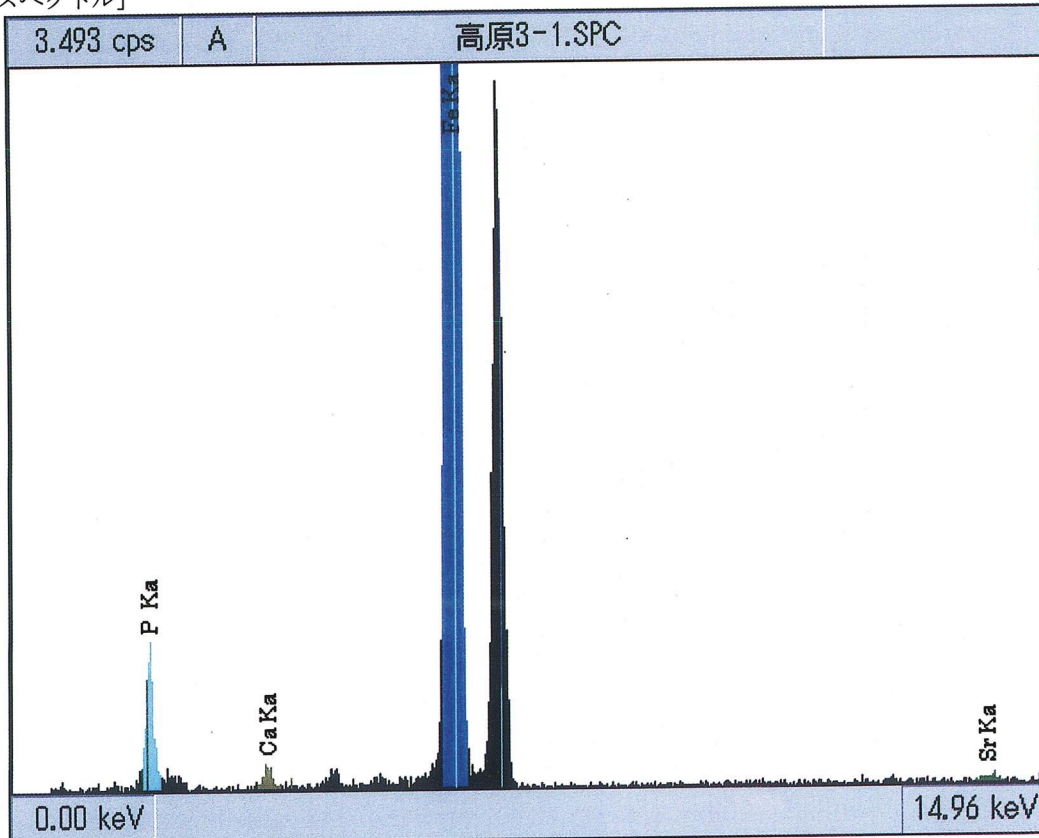
測定装置	SEA5230
測定時間 (秒)	180
有効時間 (秒)	176
試料室雰囲気	真空
コリメータ	φ0.1 mm
励起電流 (kV)	50
管電流 (μA)	1000
コメント	99056 高原No.3 の白い部分

[試料像]



視野: [X Y] 6.25 4.67 (mm)

[スペクトル]



[結果]

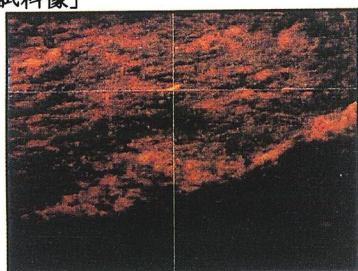
Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	R O I (keV)
15	P	リン	K α	4.628	1.88-2.15
26	Fe	鉄	K α	178.396	6.23-6.57
20	Ca	カルシウム	K α	0.853	3.54-3.84
38	Sr	ストロンチウム	K α	0.450	13.92-14.36

図1 No.3 ヤリガンナ (○で囲った部分) のケイ光X線スペクトル

[測定条件]

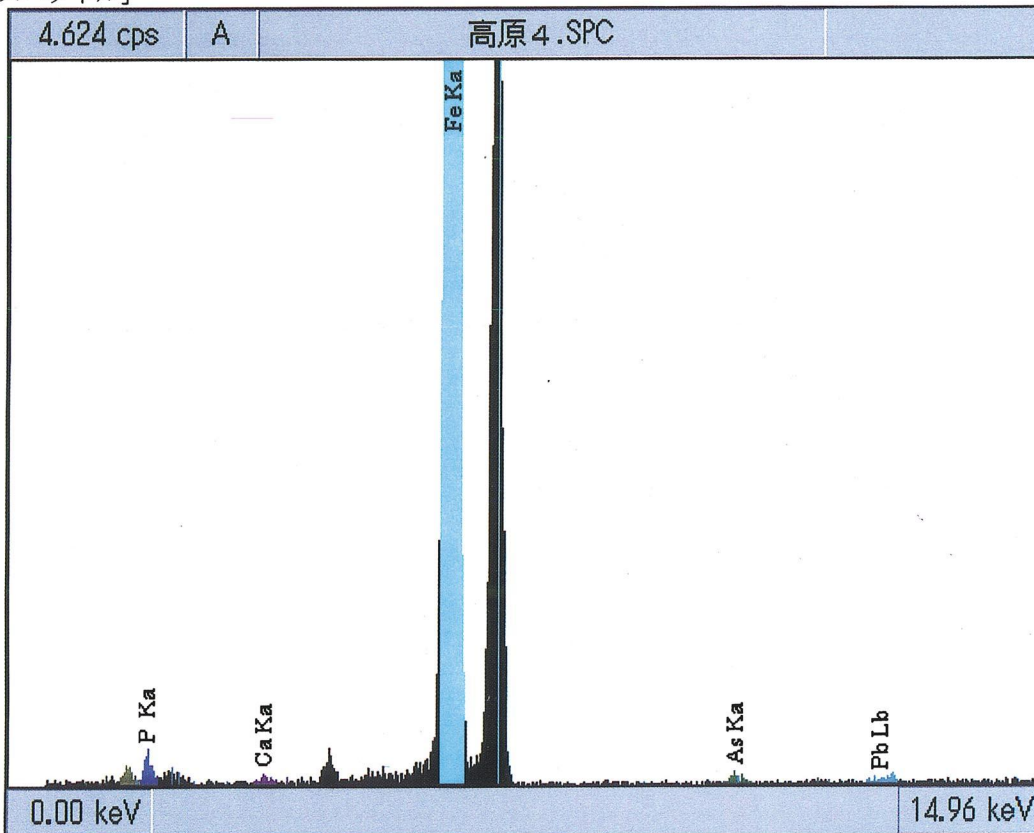
測定装置	SEA5230
測定時間 (秒)	180
有効時間 (秒)	176
試料室雰囲気	真空
コリメータ	φ0.1 mm
励起電流 (kV)	50
管電流 (μA)	1000
コメント	99056 高原No.4 鹿骨?

[試料像]



視野: [X Y] 6.25 4.67 (mm)

[スペクトル]



[結果]

Z	元素	元素名	ライン	A(cps)	ROI (keV)
26	Fe	鉄	K α	347.527	6.23-6.57
15	P	リン	K α	1.470	1.88-2.15
14	Si	ケイ素	K α	0.908	1.61-1.87
33	As	ヒ素	K α	0.579	10.33-10.73
82	Pb	鉛	L β	0.573	12.42-12.84
20	Ca	カルシウム	K α	0.512	3.54-3.84

図 2 No.4 刀子 (○で囲った部分) のケイ光X線スペクトル

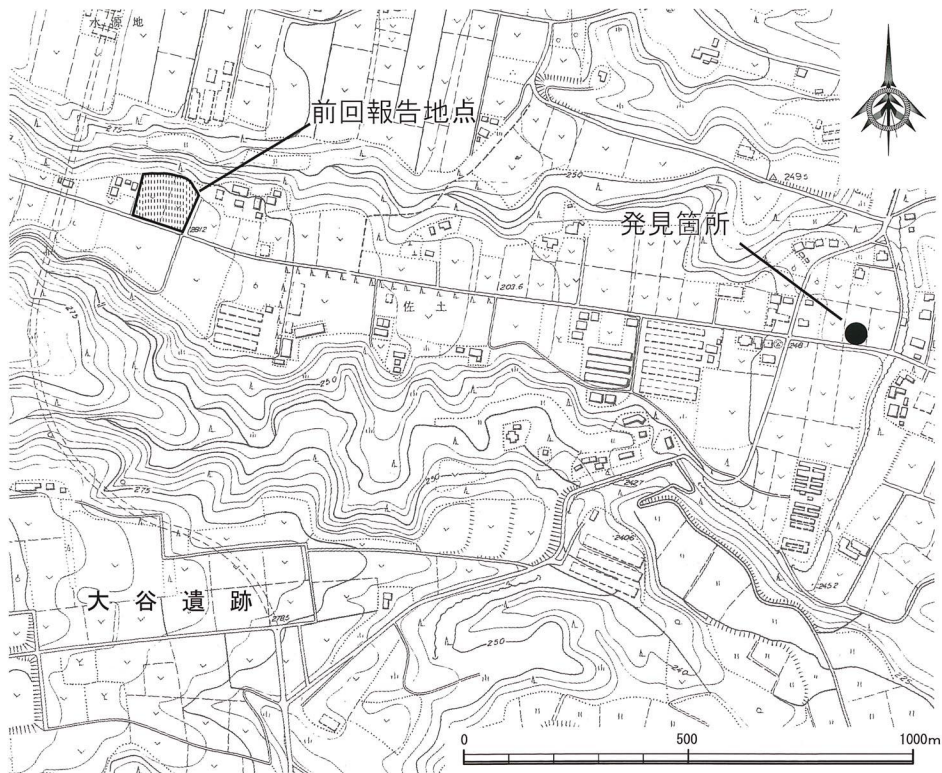
第4章 佐土遺跡出土の土器

1. はじめに

佐土遺跡は、高原町大字広原字佐土に位置する。霧島山系から東に下る細長い尾根上に立地した遺跡である。縄文時代後期の土器が広く分布し、その一部については「町内遺跡Ⅲ」『高原町文化財調査報告書 第11集』（以下『第11集』と省略）にて報告した。

2. 発見の経緯及び内容

下記の土器は、『第11集』報告箇所¹の東側、約1.5kmの地点で発見され、教育委員会に持ち込まれた。個人住宅建設に伴い、合併浄化槽設置のため約2m程掘削したところで出土した。この辺りは佐土遺跡の中心からも遠く離れており、表採資料もあまり発見されていなかった。古墳時代の甕と思われる。



佐土遺跡出土土師器

報告書抄録

フリガナ	チヨウナイイセキ
書名	町内遺跡Ⅳ
副書名	
巻次	
シリーズ名	高原町文化財調査報告書
シリーズ番号	第13集
編集者名	大學康宏
発行機関	高原町教育委員会
所在地	〒889-4492 宮崎県西諸県郡高原町大字西麓899番地
発行年月日	2004. 3. 31

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	調査期間	調査面積	調査原因
ヒロワラタ ^イ 4 ^イ セキ 広原第4遺跡	オア ^サ ヒロワラ ^サ ヒロワ 大字広原字広原4947	20040113 ~ 20040119	12 m ²	町営住宅霧島団地建設
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
なし	なし	なし	なし	
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	調査期間	調査面積	調査原因
サト ^イ セキ 佐土遺跡	オア ^サ ヒロワラ ^サ サト ^イ 大字広原字佐土	/	/	個人住宅掘削
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
散布地	古墳時代	/	土師器	